

『発心集』 後人裏書攬入説

—— 卷第六末の思想などに着目して ——

森 新之介

Abstract

問題の所在

『発心集』は、蓮胤鴨長明（久寿二年〔1155〕から建保四年〔1216〕）が晩年に編纂した仏教説話集である。伝本には版本八巻と写本五巻があり、前者の慶安四年版は今日伝存の諸本で最も原形に近いと見てよい。¹⁾しかし、幾つかの箇所は後人の増補でないかと、夙に野村八良や永積安明、橘純孝によって考証されてきた。これらを整理して築瀬一雄は、前六巻の偶数巻末と後二巻の全体は後人の増補だとする説を唱えた。²⁾

築瀬説は一定の支持を得るが、後に石田瑞磨などから批判も生じた。そのため今日では、巻第二、第四の末尾は後人増補だろうが巻第六の末尾は蓮胤の作だという見解が主流になり、後二巻の真偽については説が分かれている。『発心集』における後人増補の箇所や過程が未だ明らかでないということは、同書の研究だけでなく、蓮胤の研究にとっても重大な問題である。前六巻の偶数巻末や後二巻の全体について、改めて真偽を検証すべきだと考えられる。

そこで本稿では、通説で蓮胤の作だとされている巻第六末の思想などに着目して、これと巻第二末が本来は専修念仏者の裏書であったことを明らかにしたい。まず第一節で巻第六末の研究史について整理し、第二、第三節で蓮胤の思想が巻第六末のそれと一致しないことを論証する。そして第四節で巻第二末の由来について考察し、第五節でこれらを加えた人物について仮説を示す。

第一節 議論の前提

本節では議論の前提として、巻第六末の研究史について整理する。

この巻第六について、夙に野村八良は「其の巻末の仏説の如き、管々しく衡学的にして、初の方の巻とは其の風を異にせり」と評した。³⁾橘純孝も、同巻の最終第十三話「上東門院女房住深山事（厭穢土欣浄土事）」の「静二過ヌル事ヲ思ヘバ」（二九才）以下を「宛然本書の跋文たる感ある物」と見、その後半について「頗る説教的口調で到底長明の言と思へない」と述べた。⁴⁾本稿では、従来跋文とされてきたこの「静二過ヌル事ヲ思ヘバ」以下四丁半ほどを「巻第六末」と称する。

築瀬一雄は、巻第六末と後二巻に「説教者的態度」が共通しており、また後二巻に「浄土宗的信仰」があると述べた。⁶⁾そのため、築瀬は巻第六末に「浄土宗的信仰」を認めたとの理解も生じ、石田瑞磨はこれに異を唱えて、巻第六末が専修念仏者などでなく蓮胤の作であることは疑いなくと結論付けた。⁷⁾以後今日に至るまで四十余年、石田説が通説となり同巻末の思想研究はほぼ停止している。しかし、この通説には二つの問題があると考えられる。

第一に、石田は巻第六末に慧心僧都源信『往生要集』（寛和元年〔985〕成立）と一致する箇所が多いことを指摘し、その思想は草庵の籠に「往生要集」ゴトキノ抄物（「方丈記」二〇頁）を入れていた蓮胤のものだと判断した。だが、著名な専修念仏者で蓮胤と同時代の法然房源空（長承二年〔1133〕（建暦二年〔1212〕）も、主著『選択本願念仏集』（建久九年〔1198〕）成立。

以下、「選択集」と略す)で『往生要集』から複数箇所を引用している。そのため青山克弥が批判したように、巻第六末に『往生要集』と一致する箇所が多いからと言って、それは「源信教学の直接的撰取」であり「法然独自の立場である専修念仏への傾斜」でないと思断すべきでない。

第二に、石田や青山などは、源空の専修念仏とは諸行往生を許さない思想だと考えた。斯かる通念によれば、第三節で見る如く諸行往生を許している巻第六末は専修念仏でないということになる。だがこの十数年で専修念仏の研究が進展し、松本史朗と本庄良文、筆者は源空の専修念仏で諸行往生が許されていることを論証してきた。そのため巻第六末で諸行往生が説かれているからと言って、その思想が専修念仏でないと思断すべきでない。

次節以降では専修念仏研究の成果を活用しつつ、巻第六末の思想を分析して蓮胤のそれと比較し、『発心集』の増補過程などについて考察していく。

第二節 浄土往生の動機

本稿の結論を一部先取りして言えば、巻第六末には厭離生死と欣求菩提、本願念仏、廻向往生という四つの思想が見える。これらは、巻第一「発心集序」(以下、「序」と略す)など増補の疑いがない箇所所示された蓮胤の思想と齟齬し、専修念仏と一致する。そのため、同巻末は専修念仏者の作であったと考えられる。

本節では四つの相違の前二者について、そして次節で後二者についてそれぞれ論証する。前二者は、何のために浄土へ往生するか、という動機についてのものである。

第一項 蓮胤の恐墮地獄と欣求快樂

蓮胤は『発心集』の「序」で、自分の問題意識について斯く記している。
空ク五欲ノキツナニ引レテ、終ニ奈落ノ底ニ入ナントス。心有ラン人、誰カ此事ヲ恐ザラン哉。

五欲に絆されて地獄に墮ちることを、心ある人は恐怖せずにいられない、という。これは「方丈記」の末尾で「抑一期ノ月カケカタブキテ、余算ノ山ノ

端ハニチカシ。タチマチニ三途ノヤミニムカハントス。ナニノワザヲカ、コタムトスル」(二八頁)と述べられていた危機意識が、より切迫したものと見てよい。

では何故、蓮胤は墮地獄を恐れ浄土往生を願ったのであろうか。この問題は、蓮胤にとつて地獄や浄土がそれぞれ如何なる地だったかということでもある。巻第三第一話「江州増叟事」で、往生必至だと高く評価される翁は自分の常行を次のように明かした。

翁云ク、「……」ウヘタル時ハ、餓鬼ノ苦ミヲ思ヤリテ、「増テ」ト云フ。寒クアツキニ付テモ、寒熱地獄ヲ思事又如是。諸ノ苦ミニアフゴトニ、イヨク悪道ヲオソル。ムマキ味ニアヘル時ハ、天ノ甘露ヲ観ジテ、執ヲトメズ。若タエナル色ヲ見、勝タル声ヲキ、カウバシキ香ヲキク時モ、「是何ノ数ニカハアラン。彼極樂浄土ノヨソヲヒ、物ニフレテ増テイカニ目出カラン」ト思テ、此世ノ樂ニフケラズ」トゾ云ケル。

(二一ウ)

この翁は、飢渴寒暑に遇えば餓鬼地獄の苦しみほどでないと思ひ、甘味妙色美声芳香に遇えば天道浄土の樂しみほどでないと思ひ、悪道を恐れ快樂に耽らないようにしている、という。餓鬼道や地獄は苦痛の地で、天道や浄土は快樂の地だとされており、蓮胤が地獄を恐れるのは苦痛を厭うから、そして浄土を願うのは快樂を求めるからであったことが知られる。

斯かる浄土観は、巻第五第十三話「貧男好差図事」でも明示されている。同話は、家屋の凶面を作つて心を慰めていた貧男について、話末で斯く評する。

天上ノ樂、ナヲ終アリ。ツボノウチノスミカ、イト心ナラズ。況ヤ、ヨシナク有増ニムナシク一期ヲツクサンヨリモ、ネガハ必ズ得ツベキ安養世界ノ快樂不退ナル宮殿樓閣ヲ望メカシ。

(二七ウ(二八オ))

天道でさえ樂しみに限りがあるから、快樂不退の安養世界を願うべきだ、という。また、巻第四第九話「武州入間河沈水事」の話末評語にも「只不退ノ国ニ生レヌルバカリナン、諸ノ苦ミニナンアハザリケル」(二二ウ)とある。

このように蓮胤は、地獄での苦痛を恐れ浄土での快樂を求めており、浄土

往生の動機に快樂以上のものはなかったと考えられる。

第二項 卷第六末の厭離生死と欣求菩提

他方の卷第六末は、一部前掲したように次の文章で始まる。

靜ニ過ヌル事ヲ思ヘバ、輪廻生死ノアリサマ限リ、モナシ、ホトリモナシ。
〔…〕今猶凡夫ノツタナキ身トシテ出離ノ期ヲシラザルナリ。過去ノ
ヲロカナル事ヲ思フニ、未來モ又如此コソ。
(二九〇ウ)

自分たちは過去に際限なく輪廻生死を繰り返しており、このままでは未來も出離は期し難い、という。卷第六末では地獄に墮ちることだけでなく、六道を離れられないことが厭われている。

そのため同卷末の作者は、やや後方で浄土往生の動機について斯く述べた。

行ヲシテイヅレノ所ヲ可レ願ト思フニ、過去ニ経テ過ニシ天上ノ樂ビ何
ニカハセン。〔…〕只此度イカニモシテ不退ノ土ニ至リテ、ヤウク進
ミテ終ニ菩提ニ至ラン事ヲハゲムベキナリ。
(三〇ウ)

早く不退ニ至リヤスク、速ニ菩提ヲ得ベキ道ヲラシヘ給ヘリ。(三二ウ)

天道もまた六道の一つであり、たとえ生れても樂しみとならず願うに足らない。それよりも不退の浄土に至り、菩提を得るため修道に励むべきだ、という。このように卷第六末の作者は、蓮胤が求めなかつた菩提を浄土で得ようとしており、快樂への志向は全く見えない。

この浄土で菩提を求めるといふ問題意識は、専修念仏のそれと一致する。

源空は「往生大要鈔」(『和燈』卷第一)と「登山状」(『拾遺和燈』卷中)で、それぞれ次のように説いた。

浄土門は、まづこの娑婆世界をいとひすて、いそぎてかの極樂浄土に
むまれて、かのくに、して仏道を行ずる也。
(四九頁)

浄土門といふは、浄土にむまれて、かしくにして煩惱を断して菩提に
いたる也。
(四二〇頁)

浄土門が浄土往生を願うのは、そこで仏道を行じ菩提に至るためだ、という。梅原猛が「法然は、そこに光が溢れ、そこに鳥が鳴く美しい極樂浄土に、ほとんど関心がないかのようにである」と指摘した如く、源空にとつて浄土は享

樂でなく修道の地である。これは明らかに、『発心集』卷第六末の「此度イカニモシテ不退ノ土ニ至リテ、ヤウク進ミテ終ニ菩提ニ至ラン事ヲハゲムベキナリ」と一致する。

また源空の専修念仏において、殊に地獄を恐れるということはなく、地獄餓鬼畜生の三惡道と同じく厭う。これは、仏法に値遇できず出離生死の期が失われるということと三惡道は同じであり、その三道共通の厭わしさと比較すれば地獄の恐ろしさなどは問題でなくなるからであろう。そして卷第六末の作者は、蓮胤のように墮地獄を殊に恐れることがない。ただ「一期夢ノ如クニ過ナバ、三途マナコノ前ニ來ルベシ」(三三ウ)と述べ、三惡道に還ることを憂えるのみであり、これもまた専修念仏と一致する。

このように、蓮胤は地獄の苦痛を恐れて浄土に快樂を求め、卷第六末の作者は輪廻生死を厭い菩提出離を求める。浄土往生を願うことでは同じであるが、その動機は蓮胤と卷第六末の作者で大きく異なっていた。

第三節 浄土往生の方法

次に本節で検討する四つの相違の後二者は、如何にして浄土へ往生するか、という方法についてのものである。

第一項 蓮胤の道心往生

そもそも書名に明らかな如く、『発心集』では発心すなわち道心の発起が極めて重んじられている。蓮胤はこの発心について、「序」で斯く述べた。

賢キヲ見テハ、及難クトモコヒネガフ縁トシ、愚ナルヲ見テハ、自ら改
ムル媒トセムトナリ。〔…〕道ノホトリノアタ言ノ中ニ、我一念ノ発心
ヲ樂バカリニヤトイヘリ。
(二一ウ)

今日、「発心ヲ樂」の「樂」字はたのしみと読み、悅樂の意に解することが通説となっている。だが、その前方にある「賢キヲ見テハ」云々の出典は、『論語』里仁篇第四に見える孔子の言「見賢思齊焉、見不賢而内自省也」であり、儒者が仁を求めるように蓮胤も道心を求めていたことになる。また貴志正造が指摘した如く、「説話享受のあり方が、長明の場合、少なくとも

楽しんでという態度でないことは、各話のとり上げ方とその語り口に十分うかがえる」ため、「楽」字はねがふと読み願楽の意に解さなければならぬ⁽¹³⁾。

では何故、蓮胤は道心を渴望したのであるうか。ここで注意すべきは、道心があつても往生できなかった者や、道心がなくても往生できた者は前六巻に全く登場しないということである。すなわち、道心者は往生を遂げるか逐電渡海などして最期が明らかでないかの何れかであり、無道心者は全く往生を遂げていない。道心があれば必ず往生でき、なければ決して往生できなかったからこそ、蓮胤は快樂不退の浄土に至るため道心発起を切に願楽したと考えられる。

蓮胤は徹底して道心の有無を問題としたため、徹底して行法の如何を問題としなかった。桜井好朗は「観想や称名の念仏・法華・観音・不動の諸信仰等、大まかにいっても発心集にはかなり雑多な信仰が混在しているのが認められる⁽¹⁴⁾」と評したが、諸仏諸行の共存は編者蓮胤の思想が混乱していたことを意味しない。信じる仏や修する行が何であれ、道心さえあれば同じく往生を遂げられた。そのため巻第六末以外の前六巻に、弥陀の本願念仏を殊に重んじるような意識は存在しない⁽¹⁵⁾。

このような道心往生の思想により、廻向も問題とならなかった。如何なる善根功德を廻向しようとも道心がなければ決して往生できず、廻向しなくとも道心があれば必ず往生できるため、蓮胤には廻向すべき理由がない。巻第六末以外の前六巻で「廻向」の用例が四つと少なく、しかも廻向往生の実例や勸励が見えないことは、斯かる理解を裏付ける。

蓮胤にとって浄土往生の方法は発心がすべてであり、行法の如何や廻向の有無などは問題でなかったと言つてよい。

第二項 巻第六末の本願念仏と廻向往生

前項で見た如く、蓮胤にとっては発心こそが重要であり、特定の行法を殊に重んじることはなかった。しかし巻第六末では、道心やその発起への言及がなく、

只少時ノ念仏ノミゾ、其本願ニハカナヘル。〔…〕ミズカラガ励ミニハ

難カルベケレバ、仏ノ不思議ノ願力ニ乗ルガ故ニ、スミヤカニ至ル事ヲ得也。^(三二ウ)

經ニトケルガ如ハ、我等弥陀ヲ念ジテ仏ノ願力ニ乗ジテ必極樂ニ生ベキ事ヲ、六方恒沙ノモロノ仏、舌ヲノベテ三千界ニヲホヒテ是実ナリト証明シ給フ。^(三二オ)

と本願の念仏を修し弥陀の願力に乗ずるように力説されている。これだけでも同巻末の作者が蓮胤でないことは明らかであろう。

斯くも専修念仏者の作らしく見える巻第六末を、多くの先行研究はそうでない⁽¹⁶⁾と判断してきた。その根拠は、末尾に見える次の一文である。

但、諸行ハ宿執ニヨリテ進ム。ミヅカラツトメテ執シテ、他ノ行ソシルベカラズ。一華一香一文一句、皆西方ニ廻向セバ、ヲナジク往生ノ業トナルベシ。〔…〕イヅレノ行カ、広大ノ願海ニ入ザランヤ。^(三三ウ)

諸行を修することはその人の宿執によるため、自行に執して他行を誘つてはならない。たとえ僅少であっても供養読経を浄土に廻向すれば、同じく往生の業になる、という。石田瑞磨は「これはまさしく『往生要集』の立場である⁽¹⁷⁾」とし、源空について「かれが諸行を誘つてはならないというだろうか」などと疑つて、巻第六末の思想は専修念仏と全く異なると断定した⁽¹⁸⁾。また桜井と青山克弥も、同巻末における本願念仏などは専修念仏であり廻向往生はそうでないため矛盾している、と解釈した⁽¹⁹⁾。

だが、廻向往生は決して専修念仏と矛盾しない。松本史朗が指摘したように、源空の『選択集』第二章「善導和尚立正雜二行捨雜行歸正行之文」⁽²⁰⁾と第十一章「約對雜善讚歎念仏之文」には、それぞれ

修雜行者、必用廻向之時、成往生之因。若不用廻向之時、不成就往生之因。^(二六一頁)

念仏者捨命已後、決定往生極樂世界。余行不定。^(二七五頁)

との私釈があり、廻向すれば諸行往生でき、諸行往生は不確定ながら可能だと明言されている。専修念仏では本願念仏だけが往生を可能にするのでなく、これだけが往生を確実にする。そのため、本願念仏以外の余行を廻向しても不確定ながら往生は可能だとされておられ、廻向を問題としない蓮胤の思

想とは大きく異なる。

このように、巻第六末における本願念仏の勸励と廻向往生の認許もまた、その作者が蓮胤でなく専修念仏者であることを強く示している。

第四節 巻第二末の由来

前節まで、巻第六末には専修念仏の思想が顕著であり、蓮胤の作と見られないことを論証してきた。本節では、巻第二末もまた専修念仏者の作であり、これが本来裏書であったことを示す。

第一項 不審箇所

今日伝存の巻第二は凡そ十三話あり、第十一話「或上人不値客人事」の話末五行はその前で改行されて一字下げられ、次の如くになっている。

『坐禪三昧経』云、

「今日營此事、明日造彼事、楽著不観苦、不覺死賊

至」云云。世中ニアル人、サスガニ後世ヲ思ザルナシ。ケウ

ハ此事ヲセン、アスハ彼事ヲ営マムト思フホドニ、無常ノ

カタキノ漸近ヅキテ、命ヲ失事ヲバ知ザル也。

(字下げ改行ママ、二三ウ〜二四オ)

世人は今日明日のことに心を奪われ、無常の死が近づいていることを知らない、という。これだけを見れば、期せずして命終し地獄に墮ちることを恐怖した文とも解釈できる。だが出典の『坐禪三昧経』では、やや後方に「死賊不待時、至則無脱縁」、「悉応早捨離、一心求涅槃」とあり(二七〇頁)、生死を厭い菩提を求める専修念仏と一致する。しかも、前六巻の評語で仏典の文が漢文のまま引用されているのはこと巻第六末のみであり、同一人物の作と見るべきである。

この改行され一字下げられた話末五行について、野村八良は「後人の裏書若しくは加筆の混入か」と疑い、永積安明も「『発心集』で…引用者註」か、る書き方は他に例がないのである。而もかういふ書き方が、多くの場合、裏書記入を示す形である事は、誰も認めるであらう」と指摘した。そして巻第

『発心集』後人裏書攪入説

二第十一乃至第十三話の三話は、五巻本で巻第二第十四話「或ル上人客人不値事」の一話となつている。そのため永積のように、第十一話の「坐禪三昧経」云々と第十二、第十三話は本来一体の裏書であり、後に書写の過程で本文に攪入し、三分され内題が付けられたと見るべきである。本稿では、この五行と二話を「巻第二末」と称する。

また第十二話「舎衛国老翁不顕宿善事」と第十三話「善導和尚見仏事」は、天竺舎衛国の翁と唐の道綽善導についての説話である。やはり永積が指摘したように、この二つの異域説話は蓮胤が「序」で示した次の編纂方針に違反している。

ハカナク見事、聞事ヲ註アツメツ、シノビニ座ノ右ニヲケル事アリ。
「…」今此ヲ云ニ、天竺震旦ノ伝聞ハ、遠ケレバカ、ズ。仏菩薩ノ因縁ハ、分ニタヘザレバ是ヲ残セリ。唯我国ノ人ノ耳近ヲ先トシテ、承ハル言ノ葉ヲノミ註ス。(二一オ)

これまで見聞を採集してきたが、天竺震旦の伝聞は遠いため書かず、仏菩薩の因縁は分に堪えないため残しておいた、という。前六巻でこの編纂方針に違反した異域説話は巻第二末の第十二、第十三話のみであり、これらが当初『発心集』に存在していなかったことは疑いない。

第二項 異域説話の作者

後に分立されて第十二、第十三話となった異域説話もまた、本来は第十一話の話末五行と同じく専修念仏者による裏書であつたらう。しかし、これら異域説話が専修念仏者の裏書であつたからと言って、その作者は蓮胤でないと臆断すべきでない。

「序」に「ハカナク見事、聞事ヲ註アツメツ、シノビニ座ノ右ニヲケル事アリ」とある如く、蓮胤は「天竺震旦ノ伝聞」を当初から書かなかつたのではなく、書いたものの対句になつている「仏菩薩ノ因縁」と同じく除外し、『発心集』に収めなかつたらしい。すなわち天竺震旦の説話は収録されなかつただけで、蓮胤草庵の筐底に保管されていたと考えられる。そして専修念仏者は蓮胤の死後、草庵から『発心集』原本とともに異域説話などを発見し、

『坐禪三昧經』云「云々の感懐とともに舎衛国老翁と道綽善導についての二話を紙背に転写した、ということも有り得なくない。

二話の前者たる第十二話は、釈迦が舎衛国の醜く賤しい老翁について、もし前世で「此世」を祈れば同国有数の「長者」となり、もし「出離」や「得脱」、「証果」に志せば「羅漢」などになっていただろうが、「愚ニモノウクシテ、〔…〕今ツタナキ身トシテ、受ガタキ人界ノ生ヲ空スゴシツル也」と憐れんだものである（二四ウ）。第二節第二項で見た如く、出離や得脱、証果を求めることは専修念仏と親和するものの、富貴を求めることはそうでない。

また、同話の話末評語は次の如くである。

我タマ〜『法華經』ニ値タテマツリ、弥陀仏ノ悲願ヲ聞ナガラ、ツトメ行ズシテ、徒ニアタラ月日ヲスゴス。露モタガハズ、乞者ノヲキナ也。

（一五オ）

ここで『法華經』と弥陀四十八願への値遇を悦んでいるが、同経は本話の内容と全く関連しない。専修念仏者が理由なく『法華經』に言及したとは考え難く、しかも「徒ニアタラ月日ヲスゴス」という文は「方丈記」の「イカゝ要ナキタノシミヲノベテ、アタラ時ヲスガム」（二八頁）と近似する。そのため本話は蓮胤の作であり、何の志もなく偷安すべきでないという趣旨であったが、専修念仏者は欣求菩提の文言などに共感して紙背に転写したと考えられる。

そして後者の第十三話は、浄土宗の先師とされる道綽と善導についての説話であり、専修念仏者としては当然拾遺したくなるものである。本話の作者は、浄土往生の条件として「志深シテ怠ズ」（二五ウ）という一事を挙げるのみで、弥陀念仏の専修に言及していない。そのため本話もまた蓮胤が作り専修念仏者が写したものと見てよい。

このように巻第二末の異域説話は、明らかに編集方針に違反しているものの、その思想や文章は蓮胤の作として疑わしくない。二話は本来蓮胤の作であり、専修念仏者が『坐禪三昧經』云「云々とともに裏書したものが本文に摺入したと解釈することで、はじめて不審は解消されよう。

第五節 専修念仏者の比定

前節では、巻第二末は専修念仏者による裏書が摺入したものであることを論証した。巻第二末と巻第六末が同一の専修念仏者によるものであり、しかも前者が本来裏書であったならば、後者もまたそうだったと考えられる。本節では、これらを紙背に記した専修念仏者が誰であったかについて仮説を示す。

第一項 蓮胤遺友の禅寂

問題の専修念仏者を特定するために着目すべきは、巻第六末の前方に見える次の文章である。

大方、諸仏菩薩ト申モ本ハ凡夫ナリ。我等ガ父母トモ成、妻子眷属トモタガヒニ成給ヒケン。サレド、カレハ賢ク勤ヲコナヒテ、既ニ三界ヲ出給ヘリ。我等ハ信ナク行ナカリシカバ、生死ノスモリトシテ、昔ノ結縁ノユヘニ、僅ニ御名ヲキ、誓ヲ仰グ事ヲ得タリ。今、幸ニ肩ナラベタル人ノツトメ行テ生死ヲ離ン、ニモ、又オクレナントス。（二九ウ〜三〇オ）

この出典としては、源信『往生要集』卷上上文第二「欣求浄土」にも引用された、『心地観経』の「有情輪廻生三六道、猶如車輪無三始終。或為父母、為男女、世生生互有恩」（三〇二頁）などが挙げられよう。問題は、今幸いに生死を離れようとしている「肩ナラベタル人」とは誰か、ということである。

巻第六末の作者によれば、すでに三界を出て諸仏菩薩となった嘗ての父母や妻子、眷属たちと異なり、この「肩ナラベタル人」は今將に生死を離れようとしているらしい。これを桜井好朗は、蓮胤が「肩をならべたる」かつての法友であった大原の聖たちからもとみ残されてゆく愁いを述べている」と解釈したが、これまで論証してきたように同巻末は蓮胤でなく専修念仏者の作である。しかも、肩を並べた人々や輩でなく「人」と表現されているため、不特定の多数でなく特定の人物を指すと見なければならぬ。恐らく「肩ナラベタル人」とは亡き蓮胤であり、作者はその將に生死を離れようとして

いることを偲んだのであろう。

以上のことから、巻第六末の作者は蓮胤と親交があり、その死を偲んだ専修念仏者だと推定される。そしてこのような条件に最もよく合うのは、蓮胤の道友たる如蓮房禪寂日野長親⁽²⁸⁾（未詳、仁治元年「1240」）である。禪寂は、『尊卑分脈』によれば出家して日野に外山院を建立した「源空上人弟子」であつたらしく（第二篇、一三五頁）、源空の「七箇条制誡」（元久元年「1204」十一月七日付）にも副署が見える。桜井は「長明が、単独で日野の外山に隠栖できるはずはなく、日野家とくに禪寂の配慮によるところが多であつたと考えるのが、自然であらう⁽²⁹⁾」と推測している。

先行研究でも、専修念仏の顕著な『発心集』巻第六末について、桜井は「禪寂をなかだちとした、大原の念仏聖たち⁽³⁰⁾」が増補したのでないかと疑い、三田全信は「あるいは後人の挿入かも知れないが、禪寂の口述を長明が筆記したのかも知れない⁽³¹⁾」と見ていた。しかし巻第六末が蓮胤の死を偲ぶ文章であるならば、その作者候補から禪寂を除外すべき理由はなくなる。

第二項 禪寂「月講式」との近似

蓮胤最晩年における禪寂との交わりは、蓮胤が詠えて禪寂が草した「月講式」（建保四年「1216」七月十三日付）によつて知られる。

禪寂は、月を賞玩して已まなかつた蓮胤から講式を草するように囑されたが、自然と懈怠してしまい、未だ果たさずして蓮胤に後れてしまった。そのため後悔噫膾しながらも、蓮胤の素意に答えるため講式を草したという⁽³²⁾。先行研究では殆んど指摘されていないが、この禪寂「月講式」は少なくとも蓮胤『発心集』前六巻と五箇所で文言が近似する。その対応関係を図示すれば次の如くである。

『発心集』後人裏書攬入説

対応表

『発心集』前六巻 人一期スグル間ニ、思ト思ワザ、悪業ニ非ト云事ナシ。 (巻第一「序」)	禪寂「月講式」 云、樂云愁、遠ニ離解脱。愛之翫之、無非ニ妄念。 (第二段第三節「明ニ懺悔発願」)
クラキヨリ闇キ道ニゾ入ヌベキ遥ニテラセ山ノ端ノ月 (ある遊女の歌、巻第六第十話)	自昔至今、依ニ雪月花ニ貽ニ妄念、翫ニ琴詩酒ニ動ニ邪思之輩、皆離ニ從ニ冥入レ冥之苦、互得ニ從ニ明移レ明之樂。 (第二段第三節「明ニ懺悔発願」)
今、幸ニ肩ナラベタル人ノツトメ行テ生死ヲ離ンニモ、又オクレナントス。 (巻第六末)	仍以此講演所レ生之善根、資ニ彼蓮胤上人ニ得脱。 (第三段「明ニ廻向」)
但、諸行ハ宿執ニヨリテ進ム。 (巻第六末)	抑仏種從レ縁起、回向文宜然。 (第三段「明ニ廻向」)
水ハ溝ヲタツネテナガル。更ニ草ノ露木ノシルヲキラフ事ナシ。善ハ心ニシタガヒテ趣ク。イヅレノ行カ、広大ノ願海ニ入ザランヤ。 (巻第六末)	清淨之善根、定増ニ益威光、々々若増益、善根隨廣大。譬如花匂隨レ風芬ニ郁万方、水流入レ海和合一味。 (第三段「明ニ廻向」)

※第二上段の原歌は『拾遺集』巻第廿「哀傷」にある和泉式部の詠。同下段の「從ニ冥入レ冥」の出典は『法華經』化城喻品第七の「從ニ冥入ニ於冥」。

如く、「月講式」には何らかの出典のある表現が多い⁽³⁴⁾。そのため、もし近似する箇所が一両であれば、ただの偶然によるものとも考えられる。しかし近似が五箇所、思想と関係のない「幸ニ肩ナラベタル人ノツトメ行テ生死ヲ離ン」⁽³⁵⁾「彼蓮胤上人ニ得脱」の一箇所を除外しても四箇所あることは、ただの偶然や生前の親交によるものと考え難い。これは、禪寂が「月講式」を草した当時すでに蓮胤の『発心集』を讀んでおり、またその頃に巻第六末の文章も作つたことを示しているのではなからうか。

そもそも、禪寂が亡き蓮胤の素意に答え得脱に資するためには、まずその遺意が如何なるものであつたかを正しく理解しなければならぬ。「月講式」に蓮胤への配慮が濃厚であることは、先行研究でも繰り返して指摘されている⁽³⁶⁾。また二人の関係からすれば、蓮胤の死後、遺品整理に禪寂が関与して『発心集』を発見したということは十分に有り得る。「月講式」の表現が凡そ五箇所、右の一箇所を除いても四箇所『発心集』のそれと近似していることは、二箇所は禪寂が『発心集』を讀んでいたからであり、二箇所は禪寂が巻

第六末の文章を作ったからかも知れない。

結語

以上本稿では、『発心集』巻第六末の思想などに着目し、これと巻第二末が本来後人の裏書であったことを論証した。

巻第六末は、厭離生死と欣求菩提、本願念仏、廻向往生という四つの思想を示している。これらは蓮胤の恐墮地獄と欣求快樂、道心往生と齟齬し、法然房源空の専修念仏と一致する。そのため、巻第六末が専修念仏者による作文であることは疑いない。

また、巻第二の第十一話末尾五行と第十二、第十三話も専修念仏者による増補であったろう。第十一話の『坐禪三昧經』云「以下五行はその前に改行があつて一字下げられており、本来裏書であつたことを物語る。巻第六末と同じく仏典の文を漢文のまま引用していることから、これらは同一の専修念仏者による作文と見てよい。第十二、第十三話の異域説話は専修念仏の思想と親和しつつも一致しないため、蓮胤が作つて収めなかつた説話を専修念仏者が紙背に転写したものと考えられる。

巻第六末で蓮胤の死を偲んでいることから、問題の専修念仏者は源空の遺弟にして蓮胤の遺友たる如蓮房禪寂であつたかも知れない。生前親交の深かつた禪寂であれば、蓮胤の遺品整理で『発心集』を発見し、読後の感懐などを書き添えたということは十分に有り得る。この推測は、禪寂が蓮胤の没後卅四日付で草した「月講式」に、『発心集』と近似する表現が複数あることによつても補強されよう。

なお、先行研究で後人の増補でないかと疑われている巻第四末と後二巻については、別稿で論じたい。

註

本稿で用いた史料の書誌は以下の通り。引用に当たつては適宜字体と句読点を改め、訓点や傍点、傍記、括弧、頁数を付し、改行を省き、割註を山括弧で示した。なお、『発心集』慶安四年版は早稲田大学中央図書館所蔵本も適宜参照した。

「月講式」陽明文庫本、『発心集』慶安四年版（八巻本）、同神宮文庫本（五巻本）：

鴨長明全集（貴重本刊行会）。『坐禪三昧經』、『心地観經』：大正新修大藏經。『論語』：新釈漢文大系（明治書院）。『往生要集』、『選択本願念仏集』：日本思想大系（岩波書店）。『方丈記』大福寺本：新日本古典文学大系（岩波書店）。『西指』（高田本）『西方指南抄』、『拾遺和燈』（元亨版）『拾遺和語燈録』、『和燈』（元亨版）『和語燈録』：昭和新修法然上人全集（平楽寺書店）。『尊卑分脈』：新訂増補国史大系（吉川弘文館）。

(1) 永積安明「長明発心集考」（初出1933）、「中世文学論」鎌倉時代篇「改版」、日本評論社、1946「初版1944」など参照。

(2) 築瀬一雄「発心集研究序説」（初出1938）、「発心集研究」『築瀬一雄著作集』三、加藤中道館、1975）参照。

(3) 野村八良「鎌倉時代文学新論」増補、明治書院、1926（初版1922）、三〇四頁。

(4) 橘純孝「長明発心集私見（上）」、『国語と国文学』二二・一一、1935、七二頁。

(5) 稀有な例外として貴志正造は、「跋とは書物成立の由来・経過・完成日時等の記録であつて、〔…〕評論的文章ではない。古来序のある文集に跋は付けられないのが一般で」云々と述べ、跋と称することの不当を指摘している（『発心集』総説、西尾光一・貴志編『中世説話集』『鑑賞日本古典文学』一三三、角川書店、1977、一三五頁）。

(6) 築瀬一雄「発心集研究序説」（前掲）、三三〇―三三三頁。

(7) 石田瑞磨「長明ノート——『方丈記』と『発心集』——」（第二章、初出1972）、「仏教と文学」『日本仏教思想研究』五、法蔵館、1987）参照。

(8) 青山克弥「発心集」の信仰態度小考——巻六後置跋文の再検討——」（第一部第五章、初出1981、84）、「鴨長明の説話世界」、桜楓社、1984、九二頁。

(9) 松本史朗「選択本願念仏説と悪人正因説——平雅行氏の所論をめぐつて——」（第一章、初出1998）、「法然親鸞思想論」、大蔵出版、2001）、本庄良文「法然による諸行往生の「否定」——論点の整理——」（仏教大学総合研究所編『法然仏教とその可能性——法然上人八〇〇年大遠忌記念——』、仏教大学、2012）、拙稿「法然房源空の思想」（第四章、初出2010）、「撰関院政期思想史研究」、思文閣出版、2013）など参照。今日の研究状況については、拙稿「拙著『撰関院政期思想史研究』翼増三章——再び平雅行「破綻論」などに答う——」（『論叢アジアの文化と思想』二二三、2014、第二章第二節第三項）参照。

(10) 厭離生死への言及は、偶数巻末以外の前六巻で三つある。しかし、巻第十一話「高野辺上人偽儲妻女事」はある聖の妻の（二六才）、巻第二十一話「或上人不値客人事」はある聖の（二三ウ）、そして巻第五第七話「少納言統理通世事」は僧質の（一五ウ）発言であり、評語での用例がないため蓮胤にそのような意識があつたとは見得ない。

(11) 「菩提」の用例は、偶数巻末以外の前六巻で四つある。しかし、巻第三第七話「書

写山客僧断食往生事（不可誘如此行事）は『法華經』からの引文（一四〇）、卷第四第五話「肥州僧妻為魔事（可惡惡緣事）」は惡魔の發言（二〇〇）、卷第五第八話「中納言顯基出家籠居事」は源顯基の人物描写（一六〇）、そして卷第六第一話「証空替師命事」は証空阿闍梨の發言（三〇）であり、評語での用例がないため蓮胤がこれを求めていたとは見えない。

(12) 梅原猛「法然の哀しみ」上、小学館、2004（初刊2000）、三四三頁。

(13) 貴志正造「ひじりと説話文学——『発心集』の世界——」、永井義憲・貴志編『中世』一（日本の説話）三二、東京美術、1973、一八三頁。また、同『発心集序

「一念ノ発心ヲ樂」の解」（『鴨長明の研究』一、1974）参照。

(14) 桜井好朗「発心集の思想的地位」（初出1968）、『中世日本人の思惟と表現』、未來社、1970、四〇頁。

(15) 卷第六末以外の前六巻で本願念仏に言及しているのは、卷第二十話「橋大夫発願往生事」と卷第四第七話「或女房臨終見魔變事」のみである。しかしこれら二話でも、蓮胤が本願念仏を殊に重んじていたと見えない。

前者は往生を遂げた橋守助の発願文を長く載せており、そこには

阿弥陀如来、〔…〕設四重五逆ヲ作レル人ナリトモ、命終ラン時、我国ニ生レント願ヒ、「南無阿弥陀仏」ト十度申サバ、必ズ迎ヘムト誓給ヘリ。今、此本願ヲ憑ムガ故ニ、〔…〕。（二二〇ウ）

とある。発願文の全体を見ても、その思想は源空の専修念仏と一致する。しかし蓮胤は、話末で「勤ル処ハ少ケレドモ、常ニ無常ヲ思テ、往生ヲ心ニカケム事、要ガ中要也」（二三オ）と評するのみで、往生の成否に本願念仏を関連付けていない。

なお、百数年先行する三善為康「拾遺往生伝」卷中第卅四条「橋守輔」では発願文の文面が異なり、弥陀念仏とともに法華唱題が兼修されている。そのため何者かが発願文から法華唱題を削除したことになる。田村憲治は「『発心集』では…引用者註」他にもいくつかの法華経読誦者の話がとりあげられている。そこからすれば長明自身による改変ということは考えられないことであろう、「発心集本話橋大夫守助の話も、念仏聖たちの間で語り伝えられるうちに部分的な改変が行われ、それが長明にも伝えられたのではないかと思われる」と述べており（『橋大夫発願往生事』をめぐって）、『愛文』一六、1980、一九〜二〇頁）、従うべきである。なお今村みゑ子は、発願文を改変したのは蓮胤だと見る（『発心集』「橋大夫、発願往生事」の成立と成賢の享受——長明による改変と思想——）「第一部第一編第一章、初出1987」、『鴨長明とその周辺』、和泉書院、2008）が、それでは改変された発願文と蓮胤の評語が齟齬していることなどを説明できない。池田敬子も、「長明は『方丈記』の叙述を見れば、法華経念仏兼修であったと思われる、長明自身が専修念仏発願文に書き替えたとはいささか考えにくく、既に書き替えられた文献に依ったと考えるのが穏やかであろう」と述べている（『発心集』の說話配列と長明の浄土思想）、『日本文芸研究』五六・四、2005、二六頁）。

後者では、善知識が臨終の女房に「阿弥陀仏、本願ヲツヨク念ジテ、名号ヲオコタズ唱ヘ給ヘ」（二四オ）と勧めるが、この本願念仏の勧励は説話本題と関連していない。なお、本話については山田昭全『発心集』雑考（第一篇第七章、初出1980）、『長明・無住・虎関』『山田昭全著作集』六、おうふう、2013）参照。

(16) 四つの「廻向」用例の第一、第二は、卷第四第一話「三味座主弟子得法華經

驗事」である持経者が『法華經』を読んで鬼神などに「廻向」（二ウ、四ウ）したというものであり、往生と関連付けられていない。第三は、卷第六第一話「証空替師命事」で証空阿闍梨が師に代わり命を捨て、「其功德ヲカサネテ、母ノ後世菩提ニ廻向シ奉ラン」（三オ）としたものである。これは廻向によつて自分が往生するというものでなく、またこの捨身廻向は実行されなかった。そして第四は、卷第六第九話「宝日上人詠和歌為行事（并蓮如參讚州崇徳院御所事）」で源資通が毎日琵琶の曲を弾き、「極樂ニ廻向シケル」というものである。資通が往生を遂げた

と述べられておらず、勧励とも見えない。

(17) なお、源空が道心を極めて重んじつつも、それさえあれば必ず往生できると考え

なかったことについては、拙稿「法然房源空の道心論——出離生死と心性の関連について——」（『仏教史学研究』五六・一、2014）参照。また、源空と蓮胤では

道心の理解が異なっていたかも知れず、この問題については別稿で論じたい。

(18) 石田瑞麿「長明ノート」（前掲、七七〜八頁。なお、源空は「遣北陸道書状」（承元三年〔1209〕六月十九日付、『漢燈』卷第十）で懐感「積浄土群疑論」から引用して「求都率者、勿毀西方行人。願西方者、莫毀都率業。各隨性欲、任情修学」（八〇頁）と述べており、これは『発心集』卷第六末の「諸行ハ宿執ニヨリテ進ム。ミツカラツトメテ執シテ、他ノ行ソシルベカラス」と一致する。

(19) 桜井好朗「鴨長明と念仏聖」（『初出1969』、『中世日本の精神史的景観』、塙書房、1974、一〇六頁）、青山克弥「『発心集』の信仰態度小考」（前掲、一〇四頁）参照。

(20) 松本史朗「選択本願念仏説と悪人正因説」（前掲、一七頁）。

(21) 橋純孝は「前には稀に経文を引く事はあつても其は平易に和訳されてゐた」（原割註）と述べる（『長明発心集私見』下）、『国語と国文学』一一・一一、1935、三三二頁）。ただし厳密に言えば、漢文での引用そのものは前六巻の偶数巻末以外にもあるが、会話や状況描写でなく評語で、漢詩でなく仏典の文が漢文のまま引用された箇所は、前六巻で卷第二第十一話末尾と卷第六末のみである。卷第二第四話「三河聖人寂照入唐往生事」と卷第五第八話「中納言顯基出家籠居事」での引文はそれぞれ寂照大江定基と白居易の漢詩であり、仏典の文でない。卷第四第一話と同卷第三話「永心法橋憐乞児事」ではそれぞれ『法華經』と『法華文句記』の文を漢文のまま引用しているが、これらは登場人物の發言であり地の文でない。卷第三第十話「親輔養兒往生事」と卷第五第二話「伊家并妾頓死往生事」の地の文では「法

華経」の文を漢文のまま引用しているが、これらは登場人物が読誦した箇所を示す状況描写であり評語でない。

なお、後人増補らしい五巻本の独自説話にも仏典の文を漢文のまま引用した箇所はあるが、やはり状況描写か出典説明である。独自説話については別稿で論じたい。

(22) 野村八良『鎌倉時代文学新論』増補（前掲）、三〇四頁。

(23) 永積安明「長明発心集考」（前掲）、一九九頁。また、浅見和彦「発心集の原態と増補」（『中世文学』二二二、一九七七、二四頁）参照。

(24) 永積安明「長明発心集考」（前掲、二〇〇頁）参照。また浅見和彦も、この箇所は本来一体だっただろうと推測している（『発心集の原態と増補』前掲、二四頁）。

(25) 永積安明「長明発心集考」（前掲、一九九～二〇〇頁）参照。なおこれ以前に野村八良も、「これのみ外土の説話にして、其の他と調和せざるも怪しむべく、或は後人の追加か」と疑っていた（『鎌倉時代文学新論』増補「前掲」、三〇四頁）。

(26) なお浅見和彦は、巻第二十三話の話末評語最後の「此事、道綽二限ベカラズ。モロくノ行者ヲナジカルベシ」（二五ウ）という文を「それまでついぞ見られることのない説教的口吻」とし、「行者」の語についても「ちよつと気になる言葉である」と評した（『発心集の原態と増補』前掲、一三三頁）。偶数巻末以外の前六巻で「行者」の語は巻第四第二話「浄蔵貴所飛鉢事」の会話文（六才）にしか見えず、「此事」云々は蓮胤の説話に添えられた専修念仏者の作文であったかも知れない。

(27) 桜井好朗「鴨長明と念仏聖」（前掲）、一〇二頁。

(28) 禅寂については、細野哲雄「筑州と禅寂とについての覚書」（『初出一九六六』、『鴨長明伝の周辺・方丈記』、笠間書院、一九七八）など参照。

(29) 桜井好朗「鴨長明と念仏聖」（前掲）、九八頁。

(30) 桜井好朗「鴨長明と念仏聖」（前掲）、一〇八頁。

(31) 三田全信「禅寂と月講式」（第二部第四章、初出一九七二）、『浄土宗史の新研究』、隆文館、一九七二、八八頁。

(32) なお、ニールス・ギュルベルクは「長明の死後加筆されたと推測される部分（廻向段の長明に関する一節）」と述べており、その部分以外は蓮胤生前に書かれたと見ているらしい（『月講式』にあらわれた禅寂の思想」、石上善応教授古稀記念論文集刊行会編『仏教文化の基調と展開』二、山喜房仏書林、二〇〇一、三六七頁）が、従い難い。もしそうであれば、禅寂は「自然懈怠之間」でなく、功終わらんと欲するの時などと表現していたであろう。

(33) 稀有な例外として貴志正造は、禅寂「月講式」の「三界唯一心、々外無別法」（第二段第三節「明懺悔発願」）が蓮胤「方丈記」の「夫三界ハ只心ヒトツナリ」（二七頁）と「発心集」の「諸ノ行ヒハ、皆我心ニアリ」（巻第三第八話「蓮花城入水事」）と近似することを指摘し、「無関係とは断じがたい」と述べた（『ひじりと説話文学』「前掲」、一九五頁）。

(34) ニールス・ギュルベルク「月講式」にあらわれた禅寂の思想」（前掲）参照。

(35) 桜井好朗「鴨長明と念仏聖」（前掲、一〇〇頁）、今村みゑ子「長明企画禅寂作成『月講式』の意図」（『第二編第五章、初出一九九三』、『鴨長明とその周辺』前掲、二九三頁）、猪瀬千尋「禅寂作『月講式』について——東から西へ往く本尊——」（『名古屋大学国語国文学』一〇七、二〇一四、二六頁）など参照。

付記 本稿は、平成廿七年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

The Mis-inserted Note in *Hosshinshū*: Focusing on the Thought at the End of Volume 6

Shin'nosuke MORI

Hosshinshū is a collection of Buddhist tales written by Ren'in (1155?-1216), who was also known as Kamo no Chōmei, in his last years. While the current version of book comprises eight volumes, several researchers have argued that some parts of the book must have been added by others. In this article, focusing on the thoughts at the ends of vols 2 and 6, I will prove that they were originally written by a different author.

The end of vol. 6 conveys four thoughts: dislike of samsara, longing for deliverance, Amida's original vow, and rebirth by transferring the merit of other practices. These are contrary to Ren'in's thoughts, but consistent with Senju Nembutsu Buddhist thinking. Therefore, the author of this part must have been a Senju Nembutsu Buddhist.

Regarding the last five lines of the eleventh tale in vol. 2, their separation from the previous line and the indentation of their first line with a letter indicate that these lines were originally a note on the back of the scroll. Judging by the fact that Chinese Buddhist sentences are quoted without translation only at the ends of vols 2 and 6, these parts must have been written by the same Senju Nembutsu Buddhist. Since the twelfth and thirteenth tales in vol. 2 contain thoughts that are close to but essentially different from those of Senju Nembutsu Buddhism, it can be observed that these two tales were written by Ren'in and copied by the author of the five lines.

The Senju Nembutsu Buddhist writer seems to have lamented Ren'in's death at the end of vol. 6. The individual in question might have been Nyoren bō Zenjaku (?-1240), who was a Senju Nembutsu Buddhist and Ren'in's close friend.